

一九、ヘルツェン、バクニン、クロポトキン

ロシア革命の大先達アレクサンドル・ヘルツェンとルクリユ兄弟とは、ルクリユ兄弟がロンドンに亡命した時に知り合つたらしい。エリゼがアイルランドから更に轉じて米國に渡航した時、兄のエリイに送つた手翰中に『好漢ヘルツェンに宜しく言つてくれ』という文句が発見される。エリゼは當時なお二十二・三歳の青年であつた。ヘルツェンは既に相當の年配になつてゐたであらう。一八五七年八月、エリゼは南米から歸つて兄と共同生活を始め、やがて結婚してからも、或は同居し或は隣居して生活したが、その時分もヘルツェンの一族とは常に往來した。一八六二年、エリゼはロンドンの萬國博覽會に見物に行つたが、その時はバクニンも既にシベリヤを脱して再び西歐に現われ、(一八六〇年)ロンドンにて舊友ヘルツェンの『警鐘』に健筆を揮ひ、一八六三年に波蘭人の叛亂が起つた時もバクニンはまた從來と同じ態度で之を援助した。此時フランスの勞働者二百名が倫敦に行つて英國勞働者と一堂に會して國際勞働者協會を創立し、またポー

ランドの民衆の爲に熱烈な聲援を送つたことは、『インタナショナル』の章に述べてある。バクニンがルクリユ兄弟と親交を結ぶようになったのも、蓋しこの時分のことであつたであらう。そして彼等を紹介したのはヘルツェンであらうと言われる。一八六七年頃には既に餘ほど親しくなつたと見え、エリゼはバクニンをミシェルと呼んでゐる。當時二種の國際的週刊新聞の發行計畫があり(それは『歐洲民主制』と『歐洲合衆國』と)そのいづれか分らないが、バクニンその他の推薦でエリイ・ルクリユがフランス部の主幹に選ばれた。當時バクニンを中心にして、アリスチード・レーヤルクリユ兄弟やブノア・マロン等の『國際友愛會』という秘密結社が組織されていたが、一八六八年の『平和と自由の同盟』の大會に於て、エリゼがバクニン等と一致して多數派に反對し、遂に脱退者十八名の中に加わつたことは、『最初の無政府主義的演説』の章に述べてある。

當時のルクリユ兄弟とバクニンとの交渉に就てネットラウ博士は次のように書いてゐる。

「一八六四年、バクニンは瑞典及びロンドンからフロレンスに行く途中、パリにてルクリユ兄弟と知り合いになつた。多分ヘルツェンか或はポーランドの友人の紹介によつたのであらう。彼はそこで、『國際友愛會』という秘密結社によつて、革命家達の間に連絡をつけようとしたのである。

その會にはエリイとエリゼとも加わつていた。

この會の活動に積極的に参加した譯ではないが、エリゼはあのベルンで開かれた『自由と平和』大會の分裂に際しては、その抗議文に連署した。しかし、エリゼはこの分離少數派の新たに組織した、そしてジュネーヴに本部を置いた、『社會民主國際同盟』には参加しなかつた。

一八六八年から翌年にかけての冬の間に、『國際友愛會』は解散した。その離反は、革命家というよりは寧ろ共和主義者であるエリイ・ルクリュのスペイン（この時の革命蜂起はブルボン王家を驅逐した）に於ける態度と、イタリー代表のファヌリの無政府主義宣傳に對する非難と、から起つて來たものである。

この進歩的な團體の分裂は、いたく當時の諸新聞の論評するところとなつた。一八六九年には、アンドレ・レオ夫人が妥協の社會主義を宣傳し始めた、それに對してバクニンはジュネーヴの『平等』新聞で闘つた。一八七一年の日附になつてゐるバクニンの原稿は再びこの筆戦をくり返してゐて、その中に次のような言葉がある。

私は未だアンドレ・レオ夫人と直接相識るの光榮に浴してゐない。しかしそれにしても、私は夫人の美しい社會小説によつて随分よく同夫人を知つてゐる。そして殊に夫人の最も親しい

友人の友として。その友人達の中から、ここに私はルクリュ兄弟を引用する。この二人の學者は、私の一生涯に知つた最も謙遜な、最も高雅な、最も無我な、最も純潔な、そして自分の主義に最も宗教的に献身した人々である。若しマヂニが私のように彼等を知つたならば、人は全的に無神論者たることを表言しつつもなお深く深く宗教的であり得るということを信じたであらう。それは責任の人の立派さである。彼等はその責任を最後まで果した。彼等は二人ともにかのコムミュンに参加した。兄はどうなつたのか知らないが、弟はブレストの地下獄に數千の國民軍囚徒とともに監禁せられ、しかもその常に平靜な慧智と讚美すべき精神力とを以て之に堪えた。

主義によつて集まる吾々は、その主義の實現方法の問題で非常に屢々、殆ど常に分離する。彼等もまたその友人（特に女性にしてある……石川）と同様に、少くとも二年以前には、プロレタリアの合法的要求とブルジョアの利益との妥協の可能性を信じた。彼等もまたマヂニのように、プロレタリアは先ず専ら政治的革命のために急進的ブルジョアと握手し、次でこの同じブルジョアの助力を得て經濟的改革に進むべきだと信じた。云々。

バクニンの日刊新聞の記事はわれわれに示す、パリ・コムミュン事件の後にエリゼがスイスに

來た時、彼等は互に訪問し會ひ、爾後二ヶ年間は常に通信を續けたことを。一八七四年に、バクニンが積極的活動から隱退して、その『思い出』を書いたり、その思想の綜合的解説を書いたり、すべく決心した時、彼はエリゼにその文書の發行を擔當してくれるように頼んだ。それはルクリュの受諾するところとなつた。それは一八七五年二月、エリゼがバクニンに送つた次の手紙に表明されている。

わが善き友

十二月十三日に書いた僕の手紙が君に着かなかつたことを知つた。それはゴタードの崩雪のために表われたものと信ぜざるを得ない。しかし君はその手紙を読むには及ばない。僕が常に君の眞友であり、獨立の兄弟であることを知るためには。(ネットラウの言うところによれば、この『獨立』という文字はバクニンに對するエリゼの新らしい態度を物語る。即ち一八六四年には國際友愛會内に於ける兄弟同志であつたが、一八七五年には同じ兄弟でも獨立であることを意味したので)君の原稿の言語上の修正に關して現在も將來も僕は絶對的に君に奉仕するといふことは言うまでもない。僕は君の『思い出』と『吾が思想の體制』とを鶴首して待つてゐる。勉強し給え、わが友、その爲に吾々は餘暇を持つだろう。革命の洪水は大した災害を醸しも

せず河床に復歸した。

僕はジュネーヴで君の友人セイニを知つた。彼はまことに好ましい男だ(セイニは一八七一年九月二十九日のリオンに於ける革命運動の最も熱狂的な主動者であつた……石川)

僕は君に言う、フランスの現狀に就て僕は不満ではない。展開された進化は正常のものである。吾々の上に支配しようとしているのは、宗教的廢物や舊い象徴のない純然たるブルジョアだ。それは持つてゐるだけの眞價を最大限に表わすであろう。われわれは随分厭やな日を送らねばなるまいが、しかし少なくとも經驗は結論的完了に近ずいてゐる。

娘達はすこやかだ。その教育のために僕はルガノを去らねばならない。君の妻君並びに諸友によろしく

君の舊い同志 エリゼ・ルクリュ

パリ・コムミュン直前のエリゼ・ルクリュの心境は革命の到來を身近に感じて頗る興奮状態であつたことが、當時の手紙に於て看取される。しかるに右のバクニンへの手紙では革命の洪水は

去つて、流れはもとの河床に復歸したと言つてゐる。心境の變化が察せられる。一八七五年四月十七日に彼がバクニンに送つた手紙には、「久しい此の方、僕は進歩の宿命性というものを信じなくなつた」という一句がある。彼の思想の一端が分るであらう。

それは兎に角、ルクリュ兄弟がスイスに亡命してから後には、「ヘルツェン未亡人とその子供達が屢々來訪した」というポール・ルクリュ（エリイの長男）の思い出話が『種蒔く人』(Le Semeur)のルクリュ兄弟號に載つてゐる。ヘルツェンは當時既に此の世を去つたのである。バクニンは一八七六年七月ベルンに逝去した。

クロボトキンが西歐に現われたのは一八七六・七年のことであるから、彼はバクニンには會わなかつた。學生時代に西歐を見學し、ジュラを訪問したときはバクニンはロカルノにいたので出會う機會がなかつた。クロボトキンはそれを非常に残念がつて、『思い出』の中に書いてゐる。クロボトキンは一八七七年秋のベルギーのガン市に開かれた國際社會主義者大會に出席し、その翌年にはパリに滞在し、その次の一八七九年二月には、瑞西のジュネーヴで『叛逆者』(Le Revolue)という半月刊新聞の發刊に參與し、ここでルクリュと知り合いになり、一八八〇年にはルクリュの住んでいたクラレンスに轉居して益々親交を結ぶに至つた。一八八三年のリオン裁判でクロボ

トキンが五ヶ年禁錮の刑を宣告された時、ルクリュはクロボトキンが『叛逆者』に書いた諸論文を集めて『一叛逆者の言葉』という本にして出版した。そして自らそれに序文を書いた。その序文は前段に轉載してある。『パンの略取』が始めて出版された時も、エリゼはそれに序文を書いた。ロンドンでクロボトキンの『一革命家の思い出』が出版された時、ルクリュは短い手紙を送つて、『革命家』(Revolutionist)という文字は恐らく本屋が選んだものだろうが、君のこの本を書いた精神とはそぐわない。若しセンセーショナルな文字が必要なら、『アナキスト』の思い出とすべきだ、と言つてゐる。エリゼが死んだ時に、その相續者ポール・ルクリュが一番先きにその埋葬の状況を書き送つたのはクロボトキンに對してであつた。ルクリュ一家はビエール・ラブロフやツルゲネフとも交際があつたように聞いていたが、今私はそれに就ての記憶も明白でなし、文献の徵すべきものもない。クロボトキンが自分のシベリヤ研究の全知識を傾倒して、ルクリュの『世界地理學』の此の地方に關する執筆を助けたことは、この書に一段の光彩を添えたものであると言へる。

一二〇、最初の無政府主義的演説

『平和と自由の連盟』大會の情報

一八六八年九月六日から十三日に亘つて『國際労働者協會』第三回大會が白耳義のブリュッセル市に開かれ、同年同月二十一日から二十五日にかけて『平和と自由の連盟』大會が瑞西のベルンに開かれた(ディクトル・ユウゴ)はこの大會の議長に選ばれた……(石川) 前の國際労働協會に於て、『平和自由連盟』は既に『國際労働者協會』が存する以上はその存続理由を失つたこと、從てその連盟は自ら國際労働者協會に加盟せんことを要請する、との決議が行われた(ジェームス・ギリヨームの『國際労働協會誌』第一卷六七頁) そこで此の問題が『平和・自由の連盟』大會で論争され、同大會はルクリュヤバクニンやの革命的社會主義派とブルジョア自由主義者との二派に分れ、ルクリュ・バクニン派は遂に同連盟を脱退するに至つた。この大會とこの大會に於けるエリゼの議論とは、彼の思想的立場を最も明白に表明したものである。彼がこの時の實況を兄のエリイに書き送つた手翰は、當時の形勢を知るべく極めて興味深い資料であるから、茲に譯出しよう。

最も親愛なエリイ

ベルン大會の詳細な報告を君に書き送ろうと固く意つていたし、既に三枚も書いたのであるが(それは紛失して了つた) その仕事を續けることができなくなつた。というのは、觀客たる僕の役目は、最初から變つて俳優の立場になつて了つて、その餘暇がなくなつたからだ。委員會議、大會會議、提案編成及び反對編成等それからそれへと絶えず續いて眞夜中まで及び、それから、二時三時までもなお談合が續いた。週末になつて僕はがっかりして了つた。三等車の中で過した一夜は、僕にとつて最大回復の休息であつた。

諸新聞の吾々に對する批評がどんなであつたか僕は餘り知らない。すべての報道記者が例外なしに反對側のものであつたから、彼等は巧みに吾々を歪曲して報道したに相違ないと僕は思つてゐる。即ち『Phore de la Loire』其他の新聞のルモニエ(Lemonnier)(舊サン・シモン派……(石川)『デバ(Débat)』紙のフリブール(Fribourg)一八六六年國際協會ジュネーヴ大會の佛國代表)アンドレ・ルサル(André Rousselle)などう有像無像や、ショデー(Chaudey)(ブルードンの遺言執行者……(石川)や、カステラル(Castellar)(スペインの小説家にして雄辯家に

して政治家……石川)や、アンリ・フェリエール (Henri Ferrier) や其の他等々がそれだ。今度會つた時、詳しく話すが、吾々は可なり立派に之に對處した積りだ。

最初の委員會の時からして、紛争が起るであらうことは明らかであつた。シヨデーは自らジュピターを以て任じ、雷火を持つてバクニンに投げかけるのだ。バクニンをラサール主義者だと言ふのだ。怒りに任せて彼はラサールに就て述べたが、それはラサールがどんな人物かさえも知らないことを告白したに過ぎなかつた。兎に角、戦争は宣せられた。そしてルモニエやルッセルは黨首の後から跋を引いてついでに行く。

この紳士達は『ブリュッセル』(國際勞働者協會のブリュッセル大會を指す……石川)の勞働者に對して頗る不滿なのだね。彼等は憤りに満ちてパリからやつて來た。アンテルナショナルに反撃すべく、勞働者に對するブルジョアとして、社會主義者に對する政治家として、強力に對抗すべく。彼等が特別會議の中で僕に言ふところによると、彼等はいくつかの方針に於いて實行すべき義務委託さへ持つて來たのだ。そしてその委託を彼等は實行したのだ。

若し夫れ、バクニンや吾々——その中には君の知つてゐるリシャル (Albert Richard) のスタ——はどうであつたか。吾々は言ふた、ブリュッセル大會の處作は、無作法であり、惡戯で

あるが、しかしこんな無禮は氣にかけない方が吾々の尊嚴を保つ所以であり、寧ろ社會的公平を主張すべくブリュッセルの代表者よりも一段の強硬さと團結とを示して以て、彼等の價值を全然喪失せしむべきであると。

第一日は常備軍の問題が日程に上された。この問題に就いては吾々は全部同意見であつた。その説明者はチューリツヒに亡命中の獨逸人でベウスト (Beust) という男だつたが、革命的情熱に燃えた頗る愉快な人物だ。その引き緊まつた頭、熱中する眼、常に同一目標に向つて緊張する思想、簡單にして激越な語調、それ等は總て、彼の活動的精力が共和制に向つて傾倒することを證明するものだ。その翌日スペインからのニュース (軍人革命がイサベル女王の没落逃走を結果したというニュース……石川) が電報で到達した。そして彼は即日その蜂起に参加すべく出發した。

ベウストの説明は、紛議がない譯ではなかつたが、全會一致で認められた。彼は可なり明確に政治的暗殺の理論を説明した。ルモニエやアンドレ・ルッセルの恐怖をもつてする判斷。彼等は急遽演壇に走り、かくの如き投票を差し控へんことを會衆に懇願するのであつた。ルッセ

ルはこの投票に従うよりは寧ろこの大會から離別するであろうと宣言する。次いでこのフランスのアヴォカ達の忠實な同盟者フリブルが、前會議に於ける自分の攻撃者の救援に立つという始末だ。この男は、ルッセルが前夜不用意にスパイだと評した人間なのだ。彼は事件を直裁簡明ならしむべく次の問題にイエスカノーかを投票せんと提議した。即ち吾々はボナパルトに對して匕首の權利を有するや？ 非常な激動だ。ジョリサン (Jolissaint) 瑞西人にして前年の連盟大會議長であつた……(石川) の熱烈な表意によりベウストはその演説から過激な語句を撤回すべく同意した。ルモニエは胸なでおろす。新スパルタカスは復讐の匕首を武裝せぬであらうから。

次の日は、社會問題だ。準備委員には僕も加えられたが、委員間に意見の一致を得なかつた。委員會は吾々の提案を採用することを欲しなかつた。その提案は「階級及び個人の平等化」を提議したもので、それは萬人の出發點の平等を意味し、各人が障碍無く生活を持続するようにすることであつた。

説明者ショデーが最初に發議説明を行つた。僕はこんな貧しい演説を會つて彼から聞いたこ

とはなかつた。……要するにそれは憐れむべき有様であつた。僕は彼の爲に氣の毒でならなかつた。彼が死ぬのぐりで手眞似する時というものは、全く滑稽な漫畫であつた。この日からハショデーは没落の人となつた。そしてこの氣の毒な辯護士の手から落ちたバトンがルモニエが取り上げた。

その荒唐無稽な演説に對して、バクニンは非凡な強さを持つた數語を以つて答え、彼及びその同僚に取つては、何よりも先ず原則が重要であること、集合的所有權、相續の廢止等々の方法は研究問題として差し置くこと、を明白に説明したので、ルモニエ及びその一派の爲めには、形勢が頗る難かしくなつた。幸にもドイツ人達の取りなしで彼等は救われた。僕の心から尊敬するブレウストやラデンドルフが諸難點を轉換すべき一補修案を提議した。それは彼等の眼にはチュートン人から出たという主要多大な利分を持つたのであつた。ルモニエは絶望のどたんばになつて、それにしがみつき、吾々の方でも、若し平等の原則が認められるならば、それを承認するのであつた。この點に就いて、ラデンドルフは何等かの説明を吾々に提供しようと欲した。しかしその説明は吾々を満足させるものではなかつた。

その夜、投票は國別に行われた。ロシア、ポーランド、イタリー、アメリカはバクニンの提

議に投票した。アメリカは吾々の友人のオスボーン・ウォード (Osborne Ward) 一人によつて代表された。彼は『ブルジョアジイ』に對して平靜になれなかつたのだ。ドイツ案に投票した反對側では四ヶ國が矢張り個人によつて代表された。……若し一個人によつて代表される國を棄て置くと、大會は何の決議もできずに、反對者は互に背を向け合うことになる。

だが、しかし、吾々が、どうしてもルモニエ派と調和することのできなかつたことは明白だつた。こんなに分裂した人々が共同行動を採ることは不可能だ。彼等にとつて吾々は危険人物に外ならず、吾々にとつて彼等は餘りに軟弱なのだ。バクニンは投票の結果の後直ぐに分離しようとした。しかし最も平和的なレイと僕 (Armand Reu) や、ルクリニ兄弟や、ブノア・マロン等は、バクニンを圍んで『國際友愛會』という名稱で秘密結社を營んだ人々であり、この機會に於て例の『社會民主同盟』が組織されたのである……石川) とは大會が終るまで彼を留まらしめることに成功した。そして吾々はなお諸種の討究に參與し續けた。唯だ吾々がプログラムの上に主張するなどの問題に就ても、説服し得る希望が持てないので、せめて吾々の意を明示したいと考えた。

三日目は宗教問題で、キルボフ (Wyronboff) モスロウ生れのグレゴアール・ニコライエキッチのこ

と、オーギュスト・コントの門弟で、後にコレージ・ド・フラスの科學史教授に任ぜられた……石川) が素晴らしい講演をした。蓋し大會全體に亘つての白眉と言えるであらう。……

・四日目は連合主義の問題だ。全員がその原則には賛成であつた。唯だ僕としては、それを精確にしたいと思つた。僕は明言した、愛國狂の舊い祖國や、封建的な縣や、專制の機構たる郡や區や、極端な集權者の發明せる今のコムミュンやを破壊した後に残るものは、ただ個人のみであること、そしてその個人が思うままに團結すべきことを。ここに理想的の正義がある。故に僕は提議した、コムミュンや縣の代りに生産の集團 (Association) とその集團の連合とを。

(この演説はエリゼ・ルクリュが初めて公けに無政府主義の原則を主張したものだと言われる……石川)

この演説に就ては君の恩を感じる。それにこの演説は善かつたように僕は思う。僕の次にジャクラール (Jaclard) ブランキストで一時『社會民主同盟』に加盟した……石川) が起ち、靜かな聲ではあるが、ブルジョアジイに對する驚異的な攻撃を加えた。しかし激烈な且つ不手ぎわな語句を以て演説を終つたので頗る評判が悪かつた。シヨデーがまた大體僕に對する發言をなし、ジャ

クラールの言葉を以て僕の責任に歸そうとするのであつた。投票は、賛成三十七、反対七十七。

五日目は婦人の問題だ、サンデル (Senguerle) やショデーは前夜この議案を葬ろうとしたが成功しなかつた。彼等は婦人の權利に反對の投票をする勇氣もなかつた。三人の婦人達の演説の後、投票になり、満場一致で可決。ジュコウスキ (Jukowski) ロシヤ人、バクニンやルクリュの友人で國際労働者協會の闘手……石川) とレイと僕とは、前夜とこの朝とに、一ロシヤ婦人をして家族制廢止の演説をなさしむべく成功した。このロシヤ婦人は醫學研究生だが、眞のニヒリスト型で、その眼鏡にも係わらず、愛嬌があつて、單純で、まつすぐで、輝いた容貌の持主だ。最後になつて、吾々は、理由を附して脱退を宣言した。次いでアメリカのウオードも急いで演壇に昇つて同様の宣言をした。エイテルは吾々に留まらんことを懇望する。バクニンと僕とは之に答え、そしてショデーは吾々が萬々尤もであることを宣言した。バクニンかショデーかの何れかを選ばねばならないのだ。而も双方とも大へんな禮讓だ。その夜は晩餐會だ……ルモニエは僕に握手に來た。勿論それを拒否せねばならぬ理由はない。……

要するに、キルボフや、バクニンや、レイが僕に語つたところによれば、このベルンの大會はジュネーヴの大會に比して無限の眞剣さを持つていた。それは決して混沌たるものではなく、寧ろ整然とした戦いであつた。この戦いに於いて、吾々は數では勝利しなかつたが、一つの計畫を持つて、不意の混亂に陥らない點で勝つた。平等の原則に投票しなかつた多數派は、インタナショナルの仕事をしたことになるのだ。國際協會は今全面的に勝利して『どうだ俺達が前に抗議したことが正しくはないか！』と叫んでいる。……

若し君がなお詳細の問題に就て何か説明を必要とするならば、送ることにする。

以上はルクリュの手紙の大部分である。この時の事情に關して、ジニムス・ギリヨームはその著『アンテルナショナル誌』第一卷七十五頁以下に次のように書いている。

「平和と自由の連盟の第一回大會は一八六七年にジュネーヴに開かれたが、プログラムの編成に成功しないで、それを委員に托した。

「それから一年の間、委員の中の多數派の自由主義急進主義と、少數派の革命的社會主義思想との間に、闘争があつた。そしてその委員の少數派中にはエリゼ・ルクリュとバクニンとがいた。

「ベルンの大會では、その抗爭が白日の下に展開され、遂に次のような宣言を以て少數派の脱退が決められるに至つた。

『平和と自由の連盟の大會々員大多數は、階級及び個人の經濟的社會的平等化に反對であることを、熾烈に明白に表示した。そしてこの原則の實現を全然目標としない彼等のすべての政治的綱領と行動とは、社會民主々義者換言すれば、平和と自由の良心的論理的の友の到底受諾し得ざるものであると考え、次の署名者等は連盟から脱退することを彼等の義務なりと信ずる。』
「この宣言の署名者十八人の中にはエリゼ・ルクリュがあつた云々」